

詩編39とマクベス

勝山 貴之

奨励者紹介 [かつやま・たかゆき]

同志社大学文学部教授

[研究テーマ] 初期近代英国文学

「教えてください、主よ、わたしの行く末を
わたしの生涯はどれ程のものか
いかにわたしがはかないものか、悟るように。」
御覧ください、与えられたこの生涯は
僅か、手の幅ほどのもの。
御前には、この人生も無に等しいのです。
ああ、人は確かに立っているようでも
すべて空しいもの。
ああ、人はただ影のように移ろうもの。
ああ、人は空しくあくせくし
だれの手に渡るとも知らずに積み上げる。

(詩編 39編5—7節)

私はシェイクスピアを研究対象としています。そこで今日は、私の研究領域から、シェイクスピアの悲劇『マクベス』の台詞と聖書の詩編についてお話ししたいと思います。

シェイクスピア劇『マクベス』

まず劇『マクベス』について、簡単にご紹介したいと思います。『マクベス』はシェイクスピアの『ハムレット』『オセロ』『リア王』などと共に四大悲劇と称され、現代でも繰り返し上演されて、映画化されている作品です。舞台はスコットランド、反乱軍の討伐を終え帰路についたマクベスの前に、3人の魔女が姿を現します。魔女はマクベスに、「やがては王になられるお方」との予言を伝えます。予言を耳にしたマクベスは動揺を隠せません。予言はマクベスの心の奥に眠っていた野心を目覚めさせたのでしょう。マクベスの居城にダンカン王が滞在した夜、予言のことは現実のものとすべく、夫婦は密かに国王の暗殺を企てます。さすがに主君を手にかけることに躊躇いを覚えるマクベスでしたが、夫人のことは気に取り直し、ついに短剣でダンカン王を刺し殺してしまいます。凶行におよんだ後、たちまち深い後悔の念にかられるマクベスですが、もはや後戻りはできません。王殺しを王の息子たちの仕業と見せかけ、自分はまんまと国王の座におさめます。喜んだのも束の間、今度は周りの者が自分の王座を狙っているのではないかという不安にさいなまれます。疑心暗鬼にかられた彼は、次から次へと自分の旧友や臣下の者を手にかけていきます。まるで人が変わってしまったかのように振る舞うマクベスの周りからは、次々に信頼できる

部下が去っていくこととなります。

俺もずいぶん長く生きてきた、いまや俺の人生も
乾いて黄色くなった枯れ葉同然。
年老いた身に当然まとうべきもの一名誉、敬愛、服従、多くの友など、
俺にはどうてい望めない。代わりにあるのは、
呪いの声、大きくはなくとも深い呪詛だ、
口先ばかりのご機嫌取りや追従などばかり、
解っていながら、弱い俺の心はそれをはねのけることができない

(筆者訳) (第5幕3場22—28行)

マクベスの台詞は、人望のない我が身の寂しさ、孤立していく自らの姿を語っています。

他方、マクベス夫人は、夢遊病にかかり、夜中に徘徊を繰り返すようになっていました。夫人は闇の中を歩き回り、手についた血の染みを洗い落とす仕草を繰り返します。気丈なマクベス夫人でしたが、自らの犯した罪の意識にさいなまれ、狂気の淵をさまよっているのです。やがてマクベスのもとに、夫人が亡くなったという報せが届けられます。マクベスは茫然としながらも、野心の空しさを、そして人生の空虚さを感じずにはおれません。ここでマクベスは有名な台詞を語ります。

明日、そしてその次の明日、そして更に次の明日と
時はゆっくりした足取りで、一日一日と進み
歴史の記述の最後の一語に辿り着く
昨日という日は愚かな人間が塵と化す死への道筋を
照らしてきたのだ。ええい、消えろ、人生の短い蠟燭など消えてしまえ
人生とはただ歩く影法師だ、哀れな役者に過ぎない
舞台の上では大声を張り上げ、大みえを切っても
出番が終われば、彼の話聞いてくれる者は誰もいない
白痴の語る物語に過ぎぬ、たけり狂うわめき声はすさまじいが、
意味は何もない

(筆者訳) (第5幕5場19—28行)

詩編との類似性

台詞の中にある「人生とはただ歩く影法師だ、哀れな役者に過ぎない(“Life’s but a walking shadow, a poor player”)」の部分と「白痴の語る物語に過ぎぬ、たけり狂うわめき声はすさまじいが、意味は何もない(“It is a tale/Told by an idiot, full of sound and fury/Signifying nothing.”)」という部分には、聖書の詩編39編5節—7節の影響が見られます。

「教えてください、主よ、わたしの行く末を
わたしの生涯はどれ程のものか
いかにわたしがはかないものか、悟るように。」

御覧ください、与えられたこの生涯は
僅か、手の幅ほどのもの。

(How short you have made my life!)

御前には、この人生も無に等しいのです。

(In your sight my lifetime seems nothing.)

ああ、人は確かに立っているようでも
すべて空しいもの。

(Indeed every living being is no more than a puff of wind,)

ああ、人はただ影のように移ろうもの。

(no more than a shadow.)

ああ、人は空しくあくせくし

(All we do is for nothing;)

だれの手に渡るとも知らずに積み上げる。

(we gather wealth, but don't know who will get it.)

英語訳と比較すると、マクベスの台詞の中に繰り返された詩編の字句に、気づくことができます。

マクベスはここで、時はゆっくりした歩みで進み、我々は一日一日、死へと向かって歩んでいると言います。人間は誰も死を逃れることはできません。だとすれば、私たちが何気なく過ごす一日一日は、死への道程と言うこともできるでしょう。人は人生を生きると同時に、必ず人生の時には終わりがあることを意識しなくてはなりません。

続いて台詞は、人生を演劇に喩える比喻へと展開します。16世紀には、人生は芝居のようなものだという喩えがしばしば用いられました。私たち人間は、この世に生まれ落ちて、それぞれ与えられた役割を演じているにすぎないのかもしれませんが。封建社会を生きたマクベスは、立身出世を夢見て野心を抱き、やがては王冠を手にしようと、悪戦苦闘します。しかし、人生の終着点に立ち、自分の生きた人生を振り返って見れば、そうした人物を演じていたにすぎなかったのだ、という測り知れない虚無感に包まれてしまいます。

舞台が終幕を迎えるように、そうした人生の時間が終わりを告げる時に、すなわち私たちの肉体が塵にかえる時に、すべては空しいものとなります。最後の審判において、果たして、この世の名誉や栄光は、何の意味をもつのでしょうか。一つの演目が終われば、役者が演じていた役はもう必要とされません。人生を終えて、永遠の存在である神の前に立った時に、人生における立身出世の自慢話は、まさに「白痴の語る物語に過ぎぬ、意味は何もない」ものでしょう。必死になって、他人を押しつけ、時には他人を蹴落とし、這い上がった成功の階段は、空虚な、そして無意味なものではないでしょうか。栄光や権力を手にしようともがき続けたマクベスだからこそ、その空しさを一層感じ取れるのかもしれませんが。そして野心に駆

られた彼の生き様をずっと観てきた我々観客もまた、彼の言葉を通して、彼の味わう虚無感を追体験できるのです。

詩編の一節「ああ、人は空しくあくせくし (All we do is for nothing) だれの手に渡るとも知らずに積み上げる (we gather wealth, but don't know who will get it)」という表現が胸を打ちます。私たち愚かな人間は、ともすれば目の前の世事にとらわれ、少しでも多くの物を手にしようと焦り、人に先んじようともがきます。しかし、そうして人と争ってまで、獲得しようとした名誉や財産に、一体、何の意味があるのでしょうか。死は王侯にも、名もなき貧しい人々にも平等に訪れます。私たちは、死を迎え、神の前に歩みでた時、自分が手にした栄誉や、所有している物の多さを誇ってみせることは、全くの無意味です。

現代社会の生み出す「勝ち組」と「負け組」

悲劇『マクベス』は400年前に書かれた芝居ですが、今日の我々に多くのことを語りかけてくれます。現代社会は封建社会ではありませんから、王になりたいという野心を抱く人はいないと思います。それでも私たちの中には、人より幸せでありたいという気持ちが存在し、私たちの誰もが「勝ち組」「負け組」ということばを、日常生活の中で何気なく口にすると思います。資本主義経済に支配された現代社会では、マスコミが「勝ち組」「負け組」という表現を使って、盛んに競争をはやしたてるからです。受験、就職、結婚、出世などのあらゆる場面でこのことばが使われ、私たちはそれを耳にした時、自分の心の奥の闇から、何か得体の知れないものが立ち現れてくるように感ずることはないでしょうか。まさにそれは、魔女の予言を耳にした時のマクベスがいずれは王冠を手にしたと感じたように、自分もまた「勝ち組」と呼ばれる集団の一員でありたいという願望ではないでしょうか。それは自分が得をするためなら他の人が損をすることは仕方がないという気持ちであったり、自分よりうまくいった人に対する嫉妬であったりと、実にさまざまな感情であると思います。

「勝ち組」ということばの裏には、自分さえ良ければ、という自己中心的な考えが存在していることは言うまでもありません。しかし本当の意味での人生の幸福は、自分だけが満足を得ることではないはずです。真の意味で自分が幸せになるためには、自分の周りにいる人々がすべて幸せであるよう心がけ、そのために献身を惜しまないことが重要でしょう。これは社会全体にもあてはめることができます。現代の行き過ぎた資本主義社会では、一部の人間だけに富が集中してしまい、社会的弱者は社会の底辺に滞留するばかりか、絶望から反社会的行動に走ることもあります。社会的弱者に手を差し伸べ、もう一度社会の一員として包摂していくことこそ、健全な社会を生み出していくものです。「勝ち組」「負け組」ということばは、私たちの間に溝を作り、隔たりを生み出します。それはやがて大きな格差となって、資本主義社会の歪みを露呈します。いま、日本の社会では経済格差が広がり、貧困層が増加しています。それは日本だけでなく、アジアやヨーロッパ、そしてアメリカでも富裕層と貧困層の間の格差が大きな広がりを見せ、世界中で人々の間に摩擦を生み出しつつあります。このままでは、やがてこの摩擦は取り返しのつかない衝突へと繋がりがかねません。

「勝ち組」「負け組」という、マスコミが作りだした安易なネーミング、そしてそのことばが私たちの心の奥に呼び起こす複雑な感情。私たちは、資本主義社会の掲げる宣伝文句に踊らされ、人生において本当に重要なものを見失ってしまっているのではないのでしょうか。私たちは、「勝ち組」「負け組」という価値観

にとらわれ、しばしば、詩編の一節に記された文言を忘れてしまいがちです。ひたすら競争社会に流されるばかりでは、与えられた人生の時間を生き終えた時に、自らの人生を振り返り、そこに空しさだけを感じる事となるでしょう。詩編は私たちに「御前には、この人生も無に等しいのです」と語りかけ、次のような一節へと続きます。「主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます」。常に詩編の教えを思い起こし、それを心の片隅において、生きることが大切だと思います。

2016年7月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録